ロイド・E・イーストマン著

『崩壊の根源——戦争期と革命期の国民党中国　1937～49年——』

Lloyd E. Eastman, *Seeds of Destruction: Nationalist China in War and Revolution*, 1937-1949, スタンフォード, Stanford University Press, 1984年, ix＋311ページ

著者ロイド・イーストマンは，アメリカにおける中国国民党政権史の指導的研究者の一人として知られている。本書は，『失敗した革命』(*The Abortive Revolution: China under Nationalist Rule, 1927-1937*, ケンブリッジ〔マサチューセッツ〕, Harvard University Press, 1974年）で戦前期の国民党政権を論じた著者が，その続編として1937年以降の日中戦争期から49年の崩壊に至るまでの時期の国民党政権を論じた労作である。著者はまた，概説的著作『国民党支配下の中国』(*China under Nationalist Rule: Two Essays, the Nanking Decade 1927-37, the War Years 1937-35*, アーバナ, University of Illinois, Center for Asian Studies, 1981年）のなかで日中戦争期の国民党政権を論じており，本書の一部はその成果を踏まえて書かれている。

I

本書の課題は，序によれば，1949年における国民党政権の政治的崩壊の原因を検討することである。すなわち，それは，抗日戦争の与えた疲弊の結果なのか，アメリカが内戦の決定的時期に軍事援助をさし控えたためなのか，それとも戦前の国民党政権に本来的に内在していた欠陥のためなのか。この設問に答えるべく，著者は1937～49年の国民党支配の重要な側面を代表する典型的事例を選択して本書を構成する。

本書の構成は次のとおりである。

第1章　地方政治と中央政府：雲南と重慶
第2章　農民，課税と国民党支配：戦争期
第3章　農民，課税と革命：戦後期
第4章　政権内の政治：三民主義青年団
第5章　政権内の政治：革新運動
第6章　抗戦期の国民党軍
第7章　国共内戦期の国民党軍
第8章　蔣経国と金円券改革
第9章　誰が中国を失ったか：蔣介石の証言
結　論　嵐と革命のなかで

II

次に各章の内容を簡単に紹介しておきたい。

第1章では国民党政権の構造における最も深い亀裂の一例として中央政府と龍雲支配下の雲南省政府との関係が検討される。雲南省政府は広範な自治をもつ地方権力であり，時には中央政府の存在自体を直接脅やかした。他方，中央政府は国家の資源に対する掌握が限られ，非常に弱い存在であった。このなかで，蔣介石はいわゆる＜弱者の均衡＞の政治戦略をとり，他のすべての政治勢力を弱め，自分とその中央政府の権威を維持しようとした。しかし，この戦略は国家の強化・統一という点では基本的に失敗した。それに代わる唯一の有効な政策選択肢は，雑多な地方軍の忠誠心を地方の軍閥的司令官から中央政府に変えさせるような魅力的な政策を採用することによって，中央政府の政治的支持基盤を拡大することであったとされる。しかし，これは現代の多元主義的政治(pluralist politics) を理解できなかった蔣介石には不可能なことであった。この結果，J・シェリダンのいわゆる「軍閥主義の残滓」(residual warlordism)は，1940年代末までの国民党政権の一つの特徴であったと主張される。

第2～3章は，国民党政府が自らの財政収入の中心的な柱である農民から支持と協力を獲得できなかったことを検証している。まず，戦争期とくにその後半期における農民の経済的負担は戦前よりかなり増大したこと，そしてそれは，徴税機構の腐敗，生産の減退，インフレの進行とあいまって農民の経済生活と政治姿勢に深刻な影響を与えたことが示される。すなわち，経済的には，農村からの収奪の増大の下で，特に被害を受けたのは中下層農民であり，他方，大地主は商品投機などにより高い利益を得，繁栄したとされる。この結果，戦争後半期には農村内の社会経済的格差はより拡大したという。政治的には，農民は政府に対する不満，不信を強め，その反抗が拡大した。農村における国民党政府の威信は大きく低下したことが示される。

戦後には，インフレの激化，生産経費の増大，内戦に伴う政府の徴発，徴兵などのため，農村の復興は阻害され，農民の負担は軽減されることはなかった。1948年の土地税の引上げにもかかわらず，政府の実際の徴収額は

急速に低下し，同年の実績は41年以来の最低水準に落ち，財政は破綻した。1948年までに農村社会の組織自体が解体しつつあり，農民の間の政府の威信は全般的により低下した。国民党指導部は1948年末に至りようやく農村情況の重大性を自覚し，土地改革政策の検討を始めたが，もはや手遅れであったとされる。

第４～５章は，国民党政権内部の政治的分裂，私的利益の優先の事例として三民主義青年団と革新運動の動向が検討される。青年団は，すでに革命指導政党としての実質を失ったと見なされた国民党に代わって，指導的な革命組織として1938年に組織された。当初蔣介石もそれに大いに期待をかけたが，期待は早くも失望に変わったとされる。団内における藍衣社とＣＣ団との旧態依然たる派閥抗争が継続したからである。団中央の運営は大部分，国民党の現状に批判的な藍衣社系の幹部により指導されたが，他方，非主流派のＣＣ団系の幹部は青年団よりも国民党の方に強い忠誠心を持っていたという。こうして両者の抗争は，青年団と国民党との抗争ともなって継続，激化した。1947年に青年団が国民党に吸収合併されたのは，この抗争を解決するためであったが，それは国民党内に派閥抗争を持ち込むことにすぎなかったとされる。

他方，革新運動とは，国民党と政府の堕落と無力に失望落胆し，その革新と指導権の掌握をめざしてＣＣ団や黄埔派の２級レベルの幹部が中心となって組織したものである。彼らの主な攻撃対象は中央政府の指導的ポストを占める政学派幹部であった。戦後，革新グループが本格的に運動を展開したのは1946年３月の国民党６期２中全会の場であった。そこで彼らは，政治協商会議決議を攻撃し，党・政府の改革を強く要求したという。蔣介石は革新派の要求に妥協し，２中全会決議には革新派の影響を受けて多くの修正勧告がついた。こうして革新運動は全国的な重要性をもつ運動に発展し，1947年前半まで政界において主要な勢力を保ったとされる。しかし，革新派は党・政府の派閥主義・官僚主義に対する激しい批判とは逆に，実際はそれ自身もう一つの派閥にすぎなかったのであり，1947年半ばに青年団とＣＣ団との対立が激化するに伴って，革新運動は消滅していったことが示される。

第６～７章では，国民党政権の中心的支柱とされる軍隊内の腐敗と戦闘能力の低下が進んだことが検証される。国民党軍は蔣直系の中央軍と軍閥の生き残りのさまざまな地方軍とからなる異質な連合であって，中央は地方軍を十分統制することができず，また地方軍の中央に対する忠誠も条件的であったとされる。確かに，蔣介石の「空間で時間を買う」という消耗戦の戦略は抗日戦に積極的作用をはたし，長期的には成功したが，軍の腐敗のほうがより重大であったという。この視角から，将官の質の悪化，郷村の権力者に依存した恣意的な徴兵制，兵士訓練の欠如と士気の低下，兵士への食糧・医療サービスの悪さなどの実態が生々と描かれる。抗日戦末期には国民党軍の腐敗と解体が一層進んだとされる。

戦後内戦期の国民党軍は，旧来の質を改善することなく，自らの軍隊としての不適格さを深めたことが，国民党軍側の文献に依拠しつつ示される。すなわち，「延線佔点」戦略の失敗，相互協力の欠如，戦闘精神の欠如による地方軍隊の寝返り，および共産党のスパイ工作の成功などである。特に最後の点は内戦の結果を決めるうえできわめて重要な役割をはたしたという。こうして，国民党軍の敗北は，腐敗した不適格な軍隊がはるかに有力な戦闘力と戦った結果であるとされ，アメリカ政府の武器禁輸による武器不足が国民党軍の敗北をもたらしたとの説は否定される。

第８章は，1948年８月19日から実施された法幣から金円券への幣制改革と物価凍結政策を検討する。幣制改革は，国民党政権の経済崩壊の原因となったとの説は批判され，それは，改革以前から始まっていた経済崩壊を防止するための，わずかながら成功のチャンスのある窮余の策であったとされる。この改革は上海地区で蔣経国の指導の下に最も厳格に推進されたが，結局失敗した。失敗の原因は，金円券の過剰発行が新たなインフレを招いたこと，国民政府の行政的統制力の弱さ，民衆の金円券に対する不信，にあったと分析される。この経済改革の失敗は歴史的には，国民党支配の政治的崩壊を早めたと主張される。

第９章では，蔣介石の国民党政権に対する批判的発言は全体としてみれば，蔣は国民党政権の崩壊が外国勢力のインパクトや中共軍の力によるのではなく，むしろ国民党政権自体の弱さと誤りによるものと考えていたことを明白に示しているという。そして蔣の批判は，単なるレトリックではなく，国民党政権の全体的情況と欠陥を正確に認識していたとされる。しかし，蔣が政権の欠陥を是正できなかった主要な理由は，政治・経済問題を本質的に道徳の問題とみなして，政権の弱さの真の原因が自らの政治制度と政策にあることを理解できない彼の伝統的政治観にあったとされる。

結論として，国民党政権の崩壊の基本的な原因は，第1に，蔣介石のきわめて伝統的政治観に規定された，社会的基盤を欠く軍事的権威主義政権に固有の構造的脆弱さにあったこと，第2に，日中戦争が国民党政権に与えた破壊的影響にあったことが主張される。

III

本書の最大の特徴は，中国現代史研究のなかで最も立ち遅れている分野の一つである，日中戦争期と内戦期の国民党政権の政治的社会的構造を正面からとりあげ，国民党政権の脆弱な性格を実証的に示したこと，1949年の国民党政権の崩壊の基本的要因を主に政権の本来的性格のなかに求めたこと，にある。さらに，国民党政権の性格を決定づけた中心的要因として蔣介石の，政治はエリート間の競争であるとする伝統的政治観を指摘した点も本書の特徴である。したがって，本書の枠組は，蔣介石の伝統的政治観→国民党政権の脆弱な性格→国民党政権の崩壊，という論理から成り立っていると整理できる。確かに著者は，政権崩壊の基本的原因の一つとして日中戦争の破壊的影響をあげているが，「真の原因」はそれではなく，政権の性格自体に求められている（171ページ）。著者はこの観点に立って，国民党政権の崩壊をアメリカの軍事援助拒否や中共軍の優れた軍事力から説明する見解を批判するのである。

国民党政権の崩壊の基本的原因を政権自体の性格に求める本書の主張は，斉錫生の労作，『戦時期の国民党中国』(Ch'i, Hsi-sheng, *Nationalist China at War: Military Defeats and Political Collapse 1937-45*, アンアーバー, University of Michigan Press, 1982年）にも共通してみられる。しかし，本書は，斉の著作と比べて，以下の点で特徴がある。第1に，斉は，国民党政権が日中戦争の末期に実質上崩壊したとして，政権の歴史的運命を通説よりもかなり否定的に解釈しているのに対して，イーストマンは，国民党政権は脆弱ではあるが戦時に崩壊せず，戦後4年間生き残ったとして，その存続の原因を分析している(222～225ページ)。第2に，国民党政権の性格に関して，斉は，社会的支持基盤のない，中央および地方の複数の有力な軍事支配者による高度に軍事化されたゆるやかな連合体であると規定している。斉は，このなかで「真の支配エリート」は蔣介石の中央ではなく，むしろ地方の有力な将軍たちであったとみる。他方，本書は国民党政権を「ほぼ完全に軍隊に依存した，社会的基盤のない軍事的権威主義政権」（2，225ページ）と規定する。本書はこの性格規定の下で，政権内における蔣介石の位置を斉よりもかなり高く評価している。すなわち，戦争期の蔣介石は，一定の留保はあるものの，戦前期と同様に最高の権威者であり，政権を体現する支配エリートであるとされる。そして蔣介石の政治観は国民党政権の性格を決定する中心的要因であると位置づけられる（217～218ページ)。

次に，本書のもう一つの特徴的な点は，従来ほとんど検討されていなかった個別的な歴史事例を初めて実証的に明らかにしたことである。たとえば，三民主義青年団や革新運動の成立と展開，金円券による幣制改革の政策過程などは本書が初めて学問的に光をあてた点であり，本書の強みであろう。また在華外国軍人の当時の証言や回想録を多用して，国民政府軍内部の問題情況を具体的に生々と叙述している点も印象的である。その他，個別的事例の解釈においてもいくつか注目すべき論点が提出されている。たとえば，中国革命における農民の役割は中共党史研究の中心テーマの一つであり，すでに多くの業績があるが，この問題を国民党支配地区の側から再検討していることである。著者によれば，国民党支配地区における農民の役割は決して農村の社会経済秩序を攻撃，破壊することではなく（このことは中共の軍事的政治的存在とその支持によってはじめて可能となったとされる)，主要には，国民党政府に対する穀物，金銭，人力の提供をサボタージュすることによって，究極的には国民党政権崩壊の決定的原因の一つであった財政的破綻を促したことであった。したがって，中国革命の結果に対する国民党支配地区の農民の貢献は間接的なものではあるが，現実のものであり，恐らく決定的でさえあったときわめて高く評価される（85ページ)。

また，国民党政権内における中共のスパイ工作に関して，国防部参謀次長で1949年4月の中共との和平交渉に際し，国民政府代表団の一人として参加した劉斐，そして戦争作戦局主任であった郭汝瑰が中共のスパイとして働き，国民党軍側のあらゆる主要な動きを中共側に伝えていた事実を紹介して，このスパイ工作が内戦の勝敗を決めるうえできわめて重要な役割を果たしたと評価している（167～168ページ)。これは従来の研究において見落とされていた注目される点であろう。

IV

ここでは本書の枠組の論理を中心に検討してみたい。

前述したように，本書の枠組の論理は，(1)蔣介石の伝統的政治観→(2)政権の本来的に脆弱な性格→(3)国民党政権の崩壊，であった。

まず，(1)の点に関して。蔣介石の政治観が伝統的な価値に影響されているとの見解はすでにかなり前からある。たとえば，メアリー・C・ライトは，蔣は儒教制度を回復しようとし，伝統的社会の価値，制度に完全に執着したとみ，それを1860年代の同治中興期の中国的保守主義の「ゆがめられた再来」と規定した（Wright, M. C., "From Revolution to Restoration: The Transformation of Kuomintang Ideology," *Far Eastern Quarterly*, 第14巻第4号，1955年8月）。著者は別の論文で，このライトの解釈を批判して，蔣の政治目標は伝統的ではなく新しい近代的なものであり，ただそれを達成する方法，行動様式が伝統的なものであったと主張している（"The Kuomintang in the 1930s," C. Furth 編，*The Limits of Change: Essays on Conservative Alternatives in Republican China*, ケンブリッジ〔マサチューセッツ〕, Harvard University Press, 1976年）。こうした理解は本書においては，たとえば，蔣が改革的政策の執行上の欠陥をリアルに認識していながら，彼の伝統的政治観と道徳的視角のために問題の真の性格を認識できなかったとする点に継承されている。しかし，本書ではこの蔣の政治観が当該期間にどのように変容したのか，あるいはしなかったのかという点が分析されておらず，したがって蔣の政治観はあたかも1937年から12年間の歴史的条件の激動に関係なく，当初から独立していたかのようである。その点，歴史叙述としては平板な印象を否めない。

次に，(1)→(2)の論理に関して。本書では，(1)は(2)の中心的決定要因であるとされているが，なぜそうなのかは証明されていない。政治リーダーの政治観がその政権の客観的性格を一義的に決めるのでは必ずしもなかろう。著者が(1)→(2)を主張した前提には，『失敗した革命』で主張されているような，国民党政権の性格は伝統的な価値に強く影響されているという理解，そして本書でみられるように蔣介石は国民党政権内の支配エリートであり，最も強い影響力をもっていたという理解があったと考えられる。しかし，前者の理解に関しては，国民党政権の基本的性格がはたして伝統的な価値によって十分説明できるかどうかは疑問である。すでにメツガーとマイヤースが批判しているように，単に伝統的価値の作用だけでなく，国民党のリーダーシップや戦略的決定の要因が果たした作用にも目配りする必要がある（Wilson, A. A.; S. L. Greenblat; R. W. Wilson 編, *Methodological Issues in Chinese Studies*, ニューヨーク，Praeger, 1983年，Chapter 2)。後者の理解に関しては，本書は蔣自身の発言と何廉の回想録に直接依拠しているのみで，具体的な政策形成過程における蔣の位置・役割については必ずしも明示的ではない。

次に(2)の論点に関して。この点は本書の主題の一部である。国民党政権の政治構造論としてみた場合，本書は国民党政権の構造を政権内部の関係および政権の社会との関係の両側面から考察しているといえる。まず，政権内部の関係では中央政府と地方政府，党内派閥，軍隊，経済政策（金円券の弊制改革），蔣介石の政治観が考察されているが，この政権内部の政治構造に関する本書の理解は要するに，政権の中心的支柱は軍隊であり，政府と国民党はそれに依存し，そしてこれらの政権の構成機関はそれぞれ内部が腐敗し分裂的であり（その主要な分裂面は中央対地方および派閥間におかれる），したがって政権全体としては決して統一されておらず，最も脆弱な政治体制の一つであった，というものである。本書は，政権内部の分裂，腐敗した状況に関しては，きわめて豊富な史料によって説得的に叙述している。しかし，政権全体における軍，政府，党の相互関係に関して本書は明確な像を示しているとはいえない。特に，本書は国民党政権を「軍事的権威主義政権」(military authoritarian regime) と規定しているが，その論拠は理論的にも実証的にも明確ではない。

次に，政権と社会との関係の側面では，社会的支持基盤のない政権としての「自立的政権」論が本書の主張である。この「自立的政権」論 (autonomy model) は『失敗した革命』のなかで提起されたものである。著者は最近，J・フュースミスとB・ガイザートの批判に対して「自立的政権」論の証拠はまだ選択的であり不十分であったこと，また「自立」(autonomy) なる用語は政権外のあらゆる勢力に対して政権が全く無感覚であったと誤解されやすいことを認めつつも，依然として「自立的政権」論の妥当性を主張している（"New Insights into the Nature of the Nationalist Regime," *Republican China*, 第9巻第2号，1984年2月，11～12ページ）。本書では「自立的政権」という用語は直接使われてはいない。その限りでは著者はその用語の使用に慎重になっているようである。しかし，本書が性格づけている政権と社会との関係は他でもなく「自立的政権」論で示された概念で

ある（2，225ページ）。したがって，本書は「自立的政権」論を1937～49年の国民党政権にも基本的に適用したと考えられる。この「自立的政権」の概念規定として著者は以下の点を指摘している。

すなわち，(1)政権外の組織，グループは政権の政策決定過程に影響力を及ぼす正規の制度化された手段をもたないこと，(2)政権外の組織，グループはあまりに弱体なので，その影響力は政権に責任を負わせるには，また政権内のリーダーが主に自らの利益を最大限にするよう政策を立案執行することを防ぐには，不十分であること，(3)したがって，政権と政権外の組織，グループとの間には固有の緊張，利害の対立が存在すること，である。まず，こうした「自立的政権」の特徴が本書の各章で検証されている程度は必ずしも同じではない。最も重点的に検討されているのは，政権と農民との関係であり（第2，3，6章），政権と知識人（学生・教師）や企業家との関係はごく部分的に触れられているにすぎず（第4，8章），労働者との関係は検討されていない。

次に，政権と農村社会との関係に関連して本書は日中戦争期とくにその後半期における農村社会の貧富の格差の拡大化を指摘し，その下で大地主資産家は土地税などの自らの負担を小作農に転嫁し，他方で商品投機や証券投資により高い利益をあげ，経済的に繁栄したことを主張している。しかし，農村における貧富格差の拡大化の実態的根拠として示されているのは，1943年時点の成都近郊の彭県と昆明近郊の昆陽県に関する統計にすぎない（67ページ）。この二つの統計で農村の全体的動向を論じるには明らかに無理があろう。またかりに，農民層の没落と大地主の繁栄が社会的趨勢であったとすれば，大地主と政権とは客観的には農民層の犠牲のうえに互いに利益を享受する関係にあったことになる。したがって，大地主と政権とのあいだには固有な利害対立があったとばかりは必ずしも言いきれないであろう。また「自立的政権」論を証明するうえで重要だと思われるのは，大地主層が土地税政策等の形成過程にどのように関与したのかという点であるが，本書では検討されていない。

さらに，「自立的政権」論は正規の制度的チャネルをとおした政権に対する影響力の有無に特に注目するが，非制度的チャネルをとおした影響力に関しても注目すべきではなかろうか。たとえば，大地主が不正規な非制度的手段（人的関係，地縁関係，賄賂など）をとおして，中央または地方の政府の政策決定に効果的な影響力を与える場合があったのではないかと考えられる。この点の実証は制度的な側面に比べて困難ではあろうが，一般に人的関係や地縁関係が根強い中国社会においては，不正規の非制度的手段を通じた影響力の範囲と程度は，意外と大きいのではなかろうか。

最後に，(2)→(3)の論理について。これは本書の主題の中心部である。著者の言うとおり，国民党政権を崩壊させた原因は決して単一ではなく，複合的なものであると考えられる。したがって，このなかでなにが最も基本的な原因であるかは，考えられる諸原因の相互関連を全体的に分析しなければならない。著者はこれにアプローチするにあたり，まず内因（政権内に固有な原因）と外因とに分けて検討する方法をとったうえで，外因よりも内因をより基本的で重要なものとみなしている。しかし，内因が外因よりも重要であったことの根拠は必ずしも明らかではない。政権崩壊の基本要因を政権自体の性格に求め，さらにその性格の決定因を蔣介石の政治観に求める，著者の内生論的な視角は，ともすると一種の宿命論に陥りやすい。たとえば，著者は，1930年代初に蔣介石が国民党左派の社会改革の主張を抑圧したことの遺産が本質的には1949年の政権崩壊であったと述べている（88ページ）。こうなると，国民党政権の崩壊は，その政権の出発当初において本質的に運命づけられていたことになろう。本書では，蔣介石の政治観や国民党政権の性格が歴史的条件の変動との関連なしに固定的にとらえられている傾向があるので，一層その感が深い。

こうした内生論的な視角と関連して，著者の視野はどうしても一国史的になりがちである。国際関係の動態との関連で国民党政権を位置づけていくという視角は，前著の『失敗した革命』や『国民党支配下の中国』と同様に，本書でも弱い。戦争の与えた破壊的影響とその重要性についての記述はみられるが，国際関係が国民党政権の性格をどのように規定したのか，また，国民党政権の指導的エリートが国際関係にどのように関与し，影響を与えたのか，そして国際関係と国民党政権との相互関連のダイナミックスが国民党政権の崩壊にどのように作用したのか，といった点は本書の残した重要な課題であると思われる。

以上，本書の貢献は主に従来知られていなかった国民党政権の個別的側面を実証的に明らかにしたことにあるが，本書の枠組の論証はまだ部分的で必ずしも成功しているとはいえない。したがって，本書の結論は著者自身が言うように限定的で仮説的である。

川井伸一（中央大学講師）